☆帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉砕し、世界革命戦争—世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に組織せよ！

8月5日
(毎月5、20日発行)
第277号
編集発行人　高木一夫
一部　50円
購読料(〒共)20回分1500円
30回分2000円

烽火 NOROSHI

共産主義者同盟(全国委員会)
大阪戦旗社　大阪市大淀区本庄中通3—33
TEL(06)371—3706
東京戦旗社　東京都本所郵便局私書箱44号

『組織』破防法体制を打ち砕き、人民の憤激の細流を

今秋の巨大な奔流に組織せよ

日帝の侵略反革命の野望と対決し党の武装を推進せよ

一層の激化をたどる米帝国主義の北爆、また、日中国交回復の一般的ムードの中で進行する沖縄への派兵、基地再編強化、また、革命的部分への「組織」破防法攻撃——われわれは、今秋、これらに対する断固たる反撃を、今春闘闘争の成果の上に、先頭に立って推進しなければならない。

七〇年代、本格的革命闘争の時代への幕開けに際し、昨秋米の革命的叛乱と日和見主義的叛乱への六〇年代新左翼の潮流的分解を更に深化しつつある。今や端的に、蜂起を目先だけで唱えるのかあるいは現実に蜂起の準備によりかかるのか、が問題であり、小ブル急進主義・反スタ左翼反対派に止まるのか、プロレタリア人民の一切の怒りと闘いを蜂起への道へと導き組織するのかということそれが、共産主義者が示すべき明確な指標となりつつある。かくして、問題はいよいよ核心に迫りつつある。

中米、米ソ会談以降の国際情勢と田中内閣の登場

現下における我々の第一の任務は、打ち続く、そして不断に激化する米帝の北ベトナムへの侵略、ベトナム人民への侵略反革命に対して、断固たる闘争を組織する事である。

米帝の北爆へ激化は、決してその強さを意味していず、むしろニクソンドクトリンの破産を物語っている。68年北爆「停止」の上に登場したニクソンは、ベトナム人民の英雄的闘争によって追いられたこの後退の中で、いわゆる「ベトナムのベトナム化」を中軸とし、たニクソンドクトリンとして新たな陰謀を企てた。だが、この陰謀は、ベトナム人民自身には、全インドシナ人民の斗争によって破綻せざるを得ず、この民族解放斗争の勢力にくさびを打ち込みつつ（結局は失敗する運命にあるが）北ベトナムへの無差別爆撃によって、屈服させ、いわゆる民族連合政府の樹立を目ざしている。

このようなベトナム政策を軸としつつ、西独を中心とした対東欧への接近による、米ソ平和共存の強化と、アジアでは、日帝を前面におしたてた侵略反革命同盟の強化が、現局面での米帝の世界戦略である。

これに対して、a中共は、いわゆる革命外交によって、中米会談—国連加盟・日中国交回復によって、米帝の包囲に「穴を穿ち」政策をとり、b ソ連社帝は社会帝国主義、ニクソン訪ソを受け入れる事によって米ソ平和共存を持続し、c先進国革命派は、全面的再編の過程にある。

中共のいわゆる革命外交は、これまで、我々が明らかにしてきたように、文化大革命に於ける実権派との闘争を通じて明確にしてきたソ連社帝との党派闘争を全面におし出し（従来の修正主義規定からも社帝認定への深化）また、そうする事によって大国に対する小国の立場を民族解放闘争の立場に立って事を通じて擁護せんとするものである。

それ故、反ソ急進派が言うように、平和共存外交への転換であるとかスタの本性をバクロしたとかという批判（しかも、ベトナム人民の名をかりるという恥ずべき方法で）はまったくあたっていない。むしろ、中共のこれらの動向は、一貫して周辺革命論の現在的展開である。即ち、ベトナムをはじめとするいわゆる第一中間地帯における民族解放闘争を断固として支持し続ける事つつ、他の地域に於いては、米帝国主義をなるべく孤立させるという観点からの革命外交の展開である。

このような矛盾と葛藤が、中共の政治的限界を示しており、とりわけ日本をはじめ先進帝国主義における革命路線は、米帝を包囲し浪人をしてゆく、人民民主革命として、社会民主ブルジョアジーの一部に対する党派性を欠落させざるを得ない。とりわけ中共産党自身は、後に述べるように、先進国での革命的左翼と結合し得る論理を有しているが、先進国の中共派は、人民民主主義革命論によって、このような社民への敵対、毛沢東の革命論の中から、作風や工作法一般が排除されるとともに、

7.6政治集会—7.15北熊本の成果踏まえ今秋闘争へ突き進め

7・15 蜂起—戦争派600 派兵部隊集結地へ肉迫 北熊本

右翼の襲撃を蹴散らす 宮下派の凋落尻目に九州に登場

「戒厳令一下、熊本市長毅旨の法規の中、右翼反革命と機動隊の防衛と対峙しつつ、派兵阻止—7・15北熊本現地闘争・決起集会を貫徹する反帝戦線（全国委）と結集—戦争派の隊客。

日帝はS・15沖縄「返還」以降、自らの危機を外に内に投とうとつつ命がけの飛躍を迫られアジア侵略反革命戦争遂行体制の再編強化の道をひたすら突走っている。それは、現在、内には革命的右翼への「組織」破防法攻撃として、沖縄闘争の強権的扼圧と体制内化への攻撃として、また外には日「韓」台反革命体制の強化とそれをテコとした「中国問題の処理」としてあらわれている。戦後ルタ・ジュネーブ体制をその根底から揺るがす米帝反革命軍事エスカレーションの中でその矛盾は一層急ピッチで進められようとしているのだ。かかる中でわれわれは七月十五日、蜂起—戦争派を徹導して、この帝国主義者の攻撃の環としてある自衛隊の沖縄派兵に対し、今春沖縄闘争の一切の成果を結集し、断固たる阻止闘争を展開した。

前日の七月十四日、京都に於っ込んできたのである。だが我々は、鉄の戦線崩の結着并びに桃大の密集した行動隊に数秒で打ち破られ、一担びては、機動隊に守遂ら戦線の結着ともに北熊本闘争の固い意志一致をおこなった部られて軍事的敗北の総括を行なう。時おり投石するのが精一杯であった。

だが全国の右翼を代表する自衛隊の沖縄派兵に対し、今春沖縄闘争の一切の成果を結集し、断固たる阻止闘争を展開した。

隊は、翌十五日、熊本駅頭での、私服・機動隊による反帝集団検問を強破し、同大金峯山の結着とともに市内花畑公園に真紅のヘルメット部隊を登場させたのである。待ちかまえていた様に続々と周囲に結集してくる市民に対し、我々はデモンストレーションによって自衛隊派兵阻止の意義と日本帝国主義闘争の再編の方向を提起し、このかん権力はこの交流に手出しもできずおどおどと遠巻きにして見ているのなであった。

集会開始直前、青年愛国党、大日本生産党などの右翼約三十名が宣伝カードでのりつけ襲撃に来たのである。ツルハシの柄に日の丸を巻いた者や、軍服を着た角刈りの青年が、パチンコ屋のテーマソングに送られて、我々の隊列に突

が、「過激派」に眠れたとあっては国テがたたない思ったのか、最後の力をふりしぼって再度我々の隊列に突っ込んできたのである。しかしながら、富下派の襲撃は、時おり投石するのが精一杯であった。

だが全国の右翼を代表する右翼の法規の中、右翼反革命と機動隊の防衛と対峙しつつ、派兵阻止—7・15北熊本現地闘争・決起集会を貫徹する反帝戦線（全国委）と結集—戦争派の隊客。

7・6共産同政治集会、京都商工会議所大ホールに先進的労働者、学生七〇〇余名を結集して圧倒的に勝利したからといって、必ずしも我々は勝利するとは思っていな

い。事は、彼らの思い込みとは正反対に、彼らが急速に逃げ込んでいくという事態になった。それにしても許せないのは権力である。右翼をけしかけているのは権力である。同志に対して、テロ、リンチを行なうという全くハレンチな行為にでたのである。権力は、集会破壊行為を行なった右翼を捕えるのではなく、襲撃された我々を捕えて弾圧を重ねたのである。右翼と一体になった権力が何を意図しているかは一目瞭然である。権力は「暴力行為」なるのロ実で集会への反革命的介入を試みようとしているのだ。

右翼の襲撃を蹴散らす

宮下派の凋落尻目に九州に登場

第二革マル＝日向一派に身売りした神戸地区反戦（コウモリ集団 津田グループ）の正体を暴く

慰め合う日和見主義者

非合法党建設からの逃亡で結合

「革は鞭を呼ぶ」とはよく言ったものである。我々に対しては大衆の立場から、テレコレ撃ってきつつ、他の大衆組織に対しては自らの優位性を誇るために「党」的立場から裏切りを加えてきたコウモリ集団＝津田・内藤グループ（神戸地区反戦指導部）が、ついに我々の追及にたまりかねてか、第二革マル・軍事反対派＝日和見主義集団＝日向一派（自称「戦旗派」）に身売りし、その陣門に逃げ込んだ。

すなわち、日向一派の「7・15闘争へむけての内部通達」（ナンバーリング65のもの）によれば、「一部に、……関西地方における神戸反戦（ママ）の完全たわが同盟への結集、等々としてわが同盟の外延的拡大の前進を確認しうるのである。」などと自己確認して悦にいっている有様である。「弱い者おしのなくさみ合い」とはこのことだ。

より具体的には、70年12月18日、共産同の新たな武装蜂起の出発にあたって軍事反対派＝ソビエト主義として本性をさらけ出し、党建設から逃亡し、我々の「反スタマルクス主義の止揚＝体系的非合法党建設」における、インテリ党建設ののきまりをスポ主義運動をカクレミノとすることによって（富下派への結集）幸くも生き延びている党派である。そして彼らは、昨年の沖縄闘争を糧とした秋期武装蜂起から召集し、その温床とした部隊でコノ二関西集会を開催しようとしたのだが、我々の厚い壁にはばまれ、みごとに関西（京都）での組織的蜂起に失敗した。この敗北的結論を自ら認めざるをえない彼らは、性懲りもなく、関西における日赤ヘル唯一の反蜂起戦争派・反武装闘争主義分子を根こ回り、やっとこさ神戸地区反戦内の津田グループを捜し当てたわけである。京都を軸に、一本釣りをやり、12・10日向派集会を集約し、京都の「赤ヘル社民」を組織しようと夢想したのだが、12・10集会の不発と、赤ヘル社民への道を歩みつつあるとはいえいまだ蜂起・戦争派、彼らが精果している以上、おいそれと組織できない日向派の革マル的本質を如何んともしがたく、痛言な皮肉を行ったという次第である。結局は見ての通り、日向派の神戸地区反戦への切り込みと津田グループの日向派への裏切りである。

津田グループとても、かかる日向派に無関心ではなく、71年4・28集会以降、日向派のたいともちから「コウモリ集団」へ

延びている党派である。そして彼らは、昨年の沖縄闘争を糧とした秋期武装蜂起から召集し、その温床とした部隊でコノ二関西集会を開催しようとしたのだが、我々の厚い壁にはばまれ、みごとに関西（京都）での組織的蜂起に失敗した。この敗北的結論を自ら認めざるをえない彼らは、性懲りもなく、関西における日赤ヘル唯一の反蜂起戦争派・反武装闘争主義分子を捜し回り、やっとこさ神戸地区反戦内の津田グループを捜し当てたわけである。京都を軸に、一本釣りをやり、12・10日向派集会を集約し、京都の「赤ヘル社民」を組織しようと夢想したのだが、12・10集会の不発と、赤ヘル社民への道を歩みつつあるとはいえいまだ蜂起・戦争派、彼らが精果している以上、おいそれと組織できない日向派の革マル的本質を如何んともしがたく、痛言な皮肉を行ったという次第である。結局は見ての通り、日向派の神戸地区反戦への切り込みと津田グループの日向派への裏切りである。

津田グループとても、かかる日向派に無関心ではなく、71年4・28集会以降、日向派のたいともちから「コウモリ集団」へ

通り、日向派の神戸地区反戦への切り込みと津田グループの日向派への裏切りである。

津田グループとても、かかる日向派に無関心ではなく、71年4・28集会以降、日向派のたいともちから「コウモリ集団」へ

の変身をとげ、その様子をうかがっていたのである。反スタマルクス主義を理論的支柱とし、平和台病院闘争と三反戦（神戸地区反戦・県職反戦・西宮地区反戦）による全人民的政治闘争を実践課題としていた津田グループは、蜂起＝戦争派の集会に参加したり、時には第二派、時には第三派、そしてわが蜂起・戦争派の一部に陣生しつつある「赤ヘル社民」的傾向、五・一五沖縄「返還」以降の「沖縄闘争は終った」という敵権力・社民一体となった デマ意伝をそれに対する諸派の無方針、それをついた「なしくずし的」自衛隊沖縄派兵の強行という事態、にちかわらず、我々が依拠

実体といくらかの良心が残っていたから、彼らの数々の我々に対するチッケンにもかかわらず、彼らの革命的異への転化の可能性も残っていた。

しかし、かかる段階から、明らかに、「階級的労働運動」の実践的任務である「国際主義と組織された暴力」の内実の深化ではなく、理念化された夢想せる「階級的労働運動」の歪曲を行ない、国際＝国内的階級闘争に対する徹底的実践的立場よりも批判的批判と思弁的ケイモウの立場に身を置き進的労働者を組合主義・合法主義の墓場へ埋葬する役を買って出るに至っては、粉砕するのみなんだ。

戦後ヤルタ体制の崩壊危機と日本帝国主義の侵略反革命の新段階という中で、ベトナム人民の大衆蜂がアメリカ帝国主義の軍事的エスカレートをものともせず続けられ、他方、連合赤軍の壮絶戦＝「粛清事件」となったれ打つ国際主義的「自己献身」による根底的敗北、革マル・富下派の裏切り、そして、日向一派の「7・15闘争へむけての内部通達」（ナンバーリング65のもの）によれば、「一部に、……関西地方における神戸反戦（ママ）の完全たわが同盟への結集、等々としてわが同盟の外延的拡大の前進を確認しうるのである。」などと自己確認して悦にいっている有様である。「弱い者おしのなくさみ合い」とはこのことだ。

より具体的には、70年12月18日、共産同の新たな武装蜂起の出発にあたって軍事反対派＝ソビエト主義として本性をさらけ出し、党建設から逃亡し、我々の「反スタマルクス主義の止揚＝体系的非合法党建設」における、インテリ党建設ののきまりをスポ主義運動をカクレミノとすることによって（富下派への結集）幸くも生き

主義的に総括し、「武器をとるべきではなく、「なしくずし的」自衛隊沖縄派兵の強行という中で、一度たりとも、党論の攻防を担ったことのない彼らにとって、根底的闘争の深化などできるわけはなく、ひとり大衆的闘争の挫折の中に「色々な大衆運動活動家」として、続の中に「色々な大衆運動活動家」として、のみ入ってのかさるをえない。この階級闘争の特徴の一側面を生き延びる道として彼

し、組織すべき広汎な、不断に生み出され、蓄え広がっている大衆闘争が先進的革命的労働者人民の手によって担われている。かかる現下の階級闘争の特徴をとらえるならば彼ら津田グループが日本新左翼運動の歴史的結晶の特殊性を反スタマルクス主義の実践的克服の問題として摂取していないということからのみなる予、それを根本的に克服しつつも我々は、彼らの赤ヘル社民内の優柔不断傾向に対し日向派への裏切りを説明するにあたって、この間の攻防の展開における連帯した敗北と、大衆的運動の高揚と広がりという現下の階級闘争の特徴との関係をあげたにはいられない。

日向派は、一早く恒常的武装闘争を消滅

当日、政治集会との不断の闘争のなかで、「戦士＝組織者」として鍛え上げられた反帝戦線の戦身的活動によって、敵陣間前からの

完全防衛体制が敷かれ、集会は、緊張と熱気の渦巻く中で、「蜂起＝臨時革命政府樹立に向けた党建設、共産主義運動の大躍進を

闘争の実践作戦に抗し、二四時間

闘争の実践作戦に抗し、二四時間

蜂起の大道指し示す 7・6 共産同政治集会に700名

駐屯地前で隊友反戦アピール

この発言が全体で力強く確認され、革命と反革命との攻防の中心課題である日米反革命同盟の再編強化の攻撃に対し、沖縄闘争はじめとする闘いとして、沖縄の侵略反革命への「組織」破防法攻撃として、沖縄闘争の強権的扼圧と体制内化への攻撃として、また外には日「韓」台反革命体制の強化とそれをテコとした「中国問題の処理」としてあらわれている。戦後ルタ・ジュネーブ体制の崩壊過程にある現在、日米反革命同盟の再編強化の攻撃に対して、沖縄闘争はじめとする闘いとして、沖縄の侵略反革命への攻撃として、また外には日「韓」台反革命体制の強化とそれをテコとした「中国問題の処理」としてあらわれている。戦後ルタ・ジュネーブ体制の崩壊過程にある現在、日米反革命同盟の再編強化の攻撃に対して

わが同盟の到達地平と日本革命の戦略問題

同盟12・18路線の意義と限界（その2）

はじめに

連合赤軍の凶悪な山荘籠城戦を契機とした帝国主義者の反革命攻勢と、テルアビブ空港における、日本人ゲリラの銃撃戦の契機として、今や、緊迫の如き、一大暗雲を吹の風の前に、日本革命的諸派内部に、激しい「動揺と動揺」が開始されている。

戦後ヤルタ・ジュネーブ体制の崩壊的矛盾の進行は、中国問題を軸とした、国際的諸問題の全面的再編（中米、中ソ、独ソ、独米、南北朝鮮統一問題等の決状的進行）と他方、中国共産党を軸とした、国際共産主義運動の、世界的規模での統合に向けての胎動と、反スタ・マルクス主義諸派の複度な動揺と、分解と、政治的解体を伴いながら急速に進行している。

この2つの特徴的な事態の中から、帝国主義者の全世界的規模での、侵略反革命同盟の戦略再編をもってするところのまがのえし策動と、ソ連社帝の東欧、極東を軸とした外交攻勢をもって、対中布陣の強化、その中で、我が、日本帝国主義は、日中国交回復攻勢のイニシアチブを取る事により、外交路線の「転換」を装い、その背景では、沖縄返還から、沖縄自衛隊派兵、四次防による驚異的な増強を軸に、日米安保条約に基づく、侵略反革命戦争遂行へ向けて、着々と推し進め、他方、国民の幻想を、「新生活」によって、つまるところ、社会民、社共を軸とした、帝国主義の代弁者、社会排外主義潮流の形成によって、その補完迫り、革命力に対しては、徹底弾圧戦をもって応えるという、田中体制の布陣が敷かれようとしている。

その中で、社共人民戦線は、日本共産党が、結党50年を高らかに唱い上げ、「平和、民主、独立、中立」を旗印とした、「民主連合政権構想」に隠れ「みがき」をかけ、更には「自主独立路線」の一層の体系化を試み、その下に、極東、東南アジアの革命勢力に対して「国際反戦統一戦線形成」を呼びかけ、他方、日本、EEC をはじめとした、帝国主義心臓部内における「官共共産党」に呼びかけ「ケケ国共産党会議」なるものを開催し、ソ連社会帝国主義の意図と結合し、帝国主義星中の、プロレタリアートと、革命運動の利益を、帝国主義者に売り渡すまでに「成長」をとげている。そして文、中国共産党に対しては「日本軍国主義論争」から、今や「中共は、自主独立、相互不干渉の原則をふまえにして」社会帝国主義的傾向をあびている。と云う、反動的、反革命的にボウ中傷を開始しようとしている。この日共の布陣は、驚くほどに、日帝の、戦略配置との符合を物語っている。

社会党も又、表面的には、日本共産党との独自性を強調しながらも、総体としては「社会民プロック固定化」と「労働戦線統一問題」における、イニシアチブを、取る事によって「帝国主義労働運動」との、結合を推し進め、他方、日中商関の超党派的解決を呼びかけ、公明党との親い合いを強じ、田中支持の「同盟」を、提案して、名のりを上げたのである。まさに、日共共産党に優るとも劣らぬ社会排外主義ぶりであり、帝国主義者の期待を必死になって、獲得せんとしている。

更に注目すべきなのは、反スタ・マルクス主義の反動的潜在としての革共同革マル派は、経済主義、組合主義への、傾斜を通して、社会排外主義の傾向を強めているのである。

69年日本階級闘争の到達地平を清算した、沖共斗を名のる、社会党・社青同解放派、日向派等、宮下派は「人民戦線派」への傾斜と「反スタ・マルクス主義」への回帰によって、社会排外主義潮流の補完勢力の位置に身をおく事によって、政治的延命を計ろうとしている。

そして又、我々が見る注目すべきなのは、日本革命的諸派の分解の諸様相である。69年日本階級闘争が直面した、度の突破を「綱領戦略問題の解明」に基づく、国際共産主義運動の中における、党派闘争の課題の明確化」と「それにもとづく、党の武装を軸とした、体系的非合法党の建設」と「非合法活動の系統的、体系的指導」にもとずく、非合法武装闘争を軸とした日本階級闘争の指導的帳換を通して、権力闘争への飛躍」をもって、推進せんとした、我々の布陣が、現在の様な盲面を迎えているかを明らかにしなければならない。既に我々が、「烽火」紙上に於いて明らかにしてきた如く、連合赤軍の敗北を契機として、全面化されたところの「解党派戦闘」主義の最後的破産に基づく、オプティミスティックな大衆運動への全面的転換、が人民の中へ（現代のプロードニキ、無政府主義の名分の下に）なだれをうって進行している。（赤軍派、L研、その他ノンセクトループ）そして又、これらの過程は、同時に、綱領戦略内容における「反革命国路線」とか「反戦、反ファッショ、人民共産主義革命」（豊見）等を軸に、いわゆる「近代東主義」の解体、崩壊」と云う姿をとって、清算主義がだれをうって進行している。「昨日までは、今即刻突撃を叫び、今日は、人民との地道な結合、大衆運動の必要な事を叫んでいる」彼らは、どの様な確信に基づいて、主張しているのだろうか、何と云うこれしだい思想の浮動と動揺」である事だろう。「一方では、政治的な組織と運動との高揚を切りおとめようとうつとめる現代主義的傾向はまだ決して死滅してはいない。他方では、新しい「盲潮」の一つ一つを敏感に、その解問の必要性、全体としての、運動の基本的諸任務と、恒常的な必要とから区別することの出来ない無原則な傾向が、あいかわらず、大手をふって闊歩している」（レーニン「何から始めるべきか」、一九〇一年五月）。

我々はこの間、資本主義の原則的批判を通して、資本主義社会における、階級支配の経済的基礎が、賃労働制という特殊な奴隷制にもとずいている事を明らかにすると共に、マルクス主義革命の実現に向けての、資本主義社会の、「最終的解放」（いわゆる無産の大衆の、共産主義社会への、過渡期の、プロレタリアート独裁の、国際的規模での、共産主義運動の、到達目標を、明らかにしてきた。そして、そのことを、実践として、綱領戦略問題への接近を計り、最大限、最小限綱領を軸とした、レーニンの立場を復権する事により、トロツキズムが、その変ようとする負の遺産である「過渡期綱領主義」の克服を打ちだし、更に、反スタ・マルクス主義が決定的限界（いわゆる無産の大衆を、「スターリン、綱領批判」を通して、明らかにしたように、世界プロ独＝統一共和制として、指定し、当面する国際共産主義運動に於ける最大の課題として、明らかにされた問題を、根底的に、転換せしめる事に成功した。そして、その事により「共産主義政治と、民族解放斗争との結合」を体系的非合法党の指導の下に推し進める事によって、我々はいわゆる「反スタ・トロツキズムの実践的克服をなしとげる事が出来るのである。

そして、更に、一つの「盲潮」にすらなっているところの、中間路線に対しては、いわゆるかつての、過渡期世界論の抽象性を、戦後ヤルタ・ジュネーブ体制の構造把握を「中国封じ込め」を軸とした、民族解放社会主義の巨大な革命勢力の、圧殺の中に、米ソの最大眼目のあった事を明らかにし、それを、南北朝鮮、南北ベトナム、ドイツ、ベルリン問題によって、補完し、ヨーロッパ、日本の復興米帝のヘゲモニーの下に推し進めるために、各々「マーシャル・プラン」「ドッジ・プラン」が実施され、さらに軍事的には、NATO、安保、ワルシャワ条約機構、という布陣によって、ますます金面的な、戦争の、独ソ、独米、南北朝鮮統一問題等の決状的進行と他方、中国共産党を軸とした、国際共産主義運動の、世界的規模での統合に向けての胎動と、反スタ・マルクス主義諸派の複度な動揺と、分解と、政治的解体を伴いながら急速に進行している。

この2つの特徴的な事態の中から、帝国主義者の全世界的規模での、侵略反革命同盟の戦略再編をもってするところのまがのえし策動と、ソ連社帝の東欧、極東を軸とした外交攻勢をもって、対中布陣の強化、その中で、我が、日本帝国主義は、日中国交回復攻勢のイニシアチブを取る事により、外交路線の「転換」を装い、その背景では、沖縄返還から、沖縄自衛隊派兵、四次防による驚異的な増強を軸に、日米安保条約に基づく、侵略反革命戦争遂行へ向けて、着々と推し進め、他方、国民の幻想を、「新生活」によって、つまるところ、社会民、社共を軸とした、帝国主義の代弁者、社会排外主義潮流の形成によって、その補完迫り、革命力に対しては、徹底弾圧戦をもって応えるという、田中体制の布陣が敷かれようとしている。

その中で、社共人民戦線は、日本共産党が、結党50年を高らかに唱い上げ、「平和、民主、独立、中立」を旗印とした、「民主連合政権構想」に隠れ「みがき」をかけ、更には「自主独立路線」の一層の体系化を試み、その下に、極東、東南アジアの革命勢力に対して「国際反戦統一戦線形成」を呼びかけ、他方、日本、EEC をはじめとした、帝国主義心臓部内における「官共共産党」に呼びかけ「ケケ国共産党会議」なるものを開催し、ソ連社会帝国主義の意図と結合し、帝国主義星中の、プロレタリアートと、革命運動の利益を、帝国主義者に売り渡すまでに「成長」をとげている。そして又

『組織』破防法攻撃に今秋大逆襲を

『7・27大阪地裁 第一回11・19闘争公判開かる』

統一被告団 11・19戦闘の成果鮮明に

久米川裁判長・廷吏の横暴許さず

昨年11・19北大阪武装占拠闘争を英雄的に戦った戦士達に対する第一回統一公判が、七月十七日午前十時より大阪地裁で始まった。午前九時半より裁判に先立って、大阪地裁正面玄関前に旨を結集して、集会が開かれ、我々の正当性、11・19闘争の革命的意義を深く確認し、権力裁判所の弾圧に断固、念ある手段を用いて反撃することを意思統一した。

昨秋11・19北大阪武装占拠闘争における密集遊撃戦の戦果をひきつぎ、右翼反革命を蹴散らす反帝戦線(全国委)。(7・15北熊本闘争で)

集会は、十数名の私服と地域の猛犬が、凄まじい睨まもる中で共産同(全国委)救対部のあいさつで始まり、被告団の「一、権力阻止!一、機動隊粉砕!政治警察との闘いを勝利的にかちとれ!」をかかげて政治警察との闘いを勝利的にかちとれ!11・19闘争の革命的地平を踏み固め、憑りつく沖縄人民への抑圧、侵略・反革命戦争への人民の動員・抑圧と連帯を強化せんとしている日帝ブルジョア権力をおいつめる必然なる闘いの火柱をうちあげようとの問の国家権力の反動的性格を暴露し、裁判闘争を大衆的闘争として組織し、この間の我々の地平を普遍化するとともに、獄中、非合法メンバーとの具体的結合の一契機として政治的組織的活動として展開しなくてはならない。我々は断固として最後まで闘い抜く人とは共産同を高め、公判を開かれる東京拘置所前までデモ行進。

東京拘置所前には、今までの慣例を突破しやぶって十数名の裁判所の廷吏が我々のヘルメットを取るために監視していた。彼らは、入口に防衛線を引き、「ヘルメットを取らなければ、裁判所の建物の中にはいれない」とあかした。このような不当な要求を無視して、我々が入ろうとすれば、暴力的に押し出す。我々が、裁判所への不当な抗議の運動を問いただせば、論理とあっていないまにせまい裁判所の入口をふさつくし、だれ一人と一歩もはいれないようにしてしまうありさまである。なおも我々が入ろうとすれば、暴力的に押し出す。我々が、裁判所への不当な抗議の運動を問いただせば、論理とあっていないまにせまい裁判所の入口をふさつくし、だれ一人と一歩もはいれないようにしてしまうありさまである。なおも我々が入ろうとすれば、暴力的に押し出す。

彼らの弾圧をはねのけ我々が法廷に入り切ると同時に開廷になった。開廷と同時に我々は裁判長の追求を開始した。我々の追求に恐怖した裁判長久米川は、釈明要求をおめくする我々の一切の追求に答えることができず、ただ「傷態人は発言できません。」「発言を禁止します。」とくりかえすばかりであった。それでも我々の追求が止まらないと、久米川は恐怖のあまり声も出ず、法廷内に入っていた廷吏の暴力団=警護連に、手まねで二人の同志を追出すことをあごでさせた。そして我々の追求をかなぐり捨てて、「(大阪地裁傍聞)である法廷前まで、ヘルメットをかぶって入ることは自由であることを」認めます」といった。このように混乱の責任が裁判長にあることがハッキリしたのだから、不当な廷命を取消すよう、我々が執拗に要求したにもかかわらず、まったくハンケンにもなる久米川は、退廷命令を取消そうとせず、逆に「訴訟指揮は裁判長にあるものである」などと論理にもならない論理を引き出して、ひらきなおるしまってあった。そして公判の進行を宣言し、それができないと見るや、開廷を宣して、こそこそと逃げ去ってしまったのであった。

彼らの弾圧をはねのけ我々が法廷に入り切ると同時に開廷になった。開廷と同時に我々は裁判長の追求を開始した。我々の追求に恐怖した裁判長久米川は、釈明要求をおめくする我々の一切の追求に答えることができず、ただ「傷態人は発言できません。」「発言を禁止します。」とくりかえすばかりであった。それでも我々の追求が止まらないと、久米川は恐怖のあまり声も出ず、法廷内に入っていた廷吏の暴力団=警護連に、手まねで二人の同志を追出すことをあごでさせた。そして我々の追求をかなぐり捨てて、「(大阪地裁傍聞)である法廷前まで、ヘルメットをかぶって入ることは自由であることを」認めます」といった。このように混乱の責任が裁判長にあることがハッキリしたのだから、不当な廷命を取消すよう、我々が執拗に要求したにもかかわらず、まったくハンケンにもなる久米川は、退廷命令を取消そうとせず、逆に「訴訟指揮は裁判長にあるものである」などと論理にもならない論理を引き出して、ひらきなおるしまってあった。そして公判の進行を宣言し、それができないと見るや、開廷を宣して、こそこそと逃げ去ってしまったのであった。

何故、突如、久米川は、このような強圧と恐怖にてこずったか。それは彼が強いからではない。まきに、我々の一貫した革命闘争に、とりわけ日本階級闘争の一大分岐点を形成した昨11・19北大阪武装占拠闘争に、そしてそれらを牽引したわが同盟に対して、心の底からふるえがったが故の強がりである。

中、朝、インドシナ三国人民の革命的英雄的闘いは、史上最強とまで呼ばれた米軍を撃破し、帝国主義者共を死の恐怖にたたきこんでいる。そして帝国主義者共は金帝国主義者共の最後の希望=戦略ミサイル、ジュネーブ休制の根幹に迫り、崩壊を余儀なくさせている。かかる中にあって、日帝は、アジアでの共帝の敗北を自己の代りする事でもってアジアの盟主たらんとし、自らの帝国主義としての市場圏を奪取しようとしている。そのために自帝は、戦後の帝国主義として復活過程の特殊性に規定された軍事力の増強を根底的に解決しなければならない。それは、国際反戦闘争の最前線形成に向けての共帝の敗北を自己の肩